

氏名 (生年月日)	ハセガワ ヨキヨ 長谷川 幸代 (1981年2月3日)
学位の種類	博士 (社会情報学)
学位記番号	文博甲第101号
学位授与の日付	2015年7月29日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	公共図書館の利用・非利用に関わる要因の分析と考察
論文審査委員	主査 山崎 久道 副査 宮野 勝・小野寺 夏生 (筑波大学名誉教授/科学技術・ 学術政策研究所客員研究官)

内容の要旨及び審査の結果の要旨

1. 本論文の主題(テーマ)と目的

本研究の主題は、公共図書館の「利用・非利用」と「利用頻度」への影響を与える要因が何であるかを明らかにする、ということである。公共図書館は、重要な社会教育施設のひとつであり人々の情報要求を満たし、課題解決に資するとともに、知的能力を向上させることで社会の発展に寄与するという重要な使命を担っている。

わが国においては、公共図書館の施設整備は、それなりに進んでいるものの、図書館が、人々の生活や仕事の中で、十分に活用されているとは言い難い。また、当初から図書館を使わないという人々も多数存在している。このため、公的施設としての公共図書館にとっては、現状より多くの利用者を引き付けるために、適切な計画立案を進めることが、目下の重要な課題のひとつとなっている。そのためには、さまざまな目的のために、住民が公共図書館をどのように利用するのか、あるいは利用しないのかに関する実証的な研究を行い、計画立案の中に生かすことが求められる。とくに、公共図書館を目下のところ利用しない人々の意識やその理由について明らかにすることがポイントになる。

公共図書館の目指すところは、ユネスコ公共図書館宣言にもあるように「すべての人が平等に利用できる」図書館を実現することだと考えられる。そのためには、できるだけ利用・非利用の間のギャップを解消し、誰もが使えるという理想に近づいた状態で運営されることが望ましい。そのためには、前述したように、現在の公共図書館の利用状況のみならず、潜在利用者も含めた利用者のニーズや利用・非利用の要因の理解が必要となってくる。本研究はそうした目的達成に資することを視野に置きつつ、非利用者も含めた調査と結果の分析を行い、どのような要因が公共図書館の利用・非利用や利用頻度に影響を与えているのかを分析・考察したものである。

2. 論文の構成と概要

論文の構成は、以下のようになっている。

はじめに

1章. 研究の背景

- 1.1. 用語の定義
- 1.2. 公共図書館をとりまく環境
 - 1.2.1. 公共図書館の方向性
 - 1.2.2. 読書の傾向
 - 1.2.3. わが国における図書館の動向
 - 1.2.4. 海外における図書館の現状
 - 1.2.5. 社会の中の公共図書館
- 1.3. 公共図書館に関する調査結果をふまえた展望
 - 1.3.1. 利用者についてのこれまでの調査
 - 1.3.2. 利用者の個人的背景の調査の必要性
 - 1.3.3. 図書館と並ぶ資料入手の手段である書店との比較の必要性

1章では、本研究を進めるにあたり、必要とされる用語の定義、公共図書館をとりまく環境、これまでに行われた調査結果の概観と新たな課題を記している。

2章. 先行研究

- 2.1. 利用者のニーズについての研究
 - 2.1.1. 利用者のニーズ
 - 2.1.2. インターネットの登場によるニーズの変化
 - 2.1.3. ニーズをもたない人々
- 2.2. 利用者満足度についての研究
- 2.3. 図書館のイメージについての研究
 - 2.3.1. マネジメントにおけるブランド・イメージ
 - 2.3.2. 公共図書館のイメージ
- 2.4. 図書館の利用動向についての研究
- 2.5. 図書館の利用・非利用要因についての研究
- 2.6. 先行研究の総括

2章では、公共図書館の利用に関わる先行研究を概観し、本研究の方向性から評価している。

3章. 本研究の目的と方法

- 3.1. 本研究の目的と意義
 - 3.1.1. 本研究の目的と位置付け

- 3.1.2. 本研究の社会的意義
 - 3.2. 図書館の利用に関係する要因の総合的検討の必要性
 - 3.3. 研究の方法
 - 3.3.1. 図書館における調査と分析の手法の概観
 - 3.3.2. 本研究の調査法
 - 3.3.3. 分析の方法
- 3章では、研究の目的と意義、調査方法、分析方法について述べている。

4章. 調査概要

- 4.1. 図書館利用・非利用の要因の概要
 - 4.2. インタビュー調査
 - 4.3. 質問紙調査
 - 4.3.1. 質問紙調査実施の概要
 - 4.3.2. 質問紙調査であつかうイメージに関する項目
- 4章では、行った調査の概要と、調査項目について記述している。

5章. 調査結果とそれにもとづく図書館利用・非利用要因の検討

- 5.1. 本研究で扱う独立変数（原因変数）
- 5.2. 個人的背景に関わる要因
 - 5.2.1. 属性による区分
 - 5.2.2. ニーズ
 - 5.2.3. 趣味的活動
 - 5.2.4. 読書状況
 - 5.2.5. メディア利用
 - 5.2.6. 個人のもつ社会関係資本
 - 5.2.7. 公共図書館に対するイメージ —書店イメージとの比較—
 - 5.2.8. 公共図書館イメージと公共図書館利用頻度の関係
 - 5.2.9. 過去の読み聞かせ経験と図書館利用経験
- 5.3. 図書館のハード面にかかわる要因
 - 5.3.1. 立地
 - 5.3.2. スペース・設備
- 5.4. 公共図書館のソフト面に関わる要因
 - 5.4.1. さまざまなサービスの利用
 - 5.4.2. 開館時間
 - 5.4.3. 広報と認知

5.5. 代替利用の選択（選好）による要因

5.5.1. インターネットの利用

5.5.2. 本・雑誌の購入

5.5.3. 資料入手の代替方法

5.6. 多変量解析による公共図書館利用要因の検討

5.6.1. 二項ロジスティック回帰分析による公共図書館利用要因の検討

5.6.2. 重回帰分析による公共図書館利用頻度の要因の分析

5章では、公共図書館の利用・非利用と利用頻度に影響を与えると考えられる要因をあげ、利用・非利用や利用頻度との関連について考察し、最後に様々な要因を含めた総合的な分析を行っている。

6章. 結論と展望

6.1. これまでの議論のまとめ

6.2. あるべき公共図書館像の提示

6.3. 本研究の限界と課題

6章では、分析結果の考察から導き出された結論と、問題点、今後の課題について述べている。

3. 論文の独創性と研究テーマの発展可能性

3.1. 本論文の独創性

利用者についての属性や利用状況、図書館に対する満足度などは、これまでの研究における利用者調査などによって把握されてきているが、非利用者の属性や傾向というのはあまり明らかになっていない。なぜ公共図書館を利用しないのか、その要因についてははっきりせず、一部の世論調査や住民調査結果から推測せざるを得ないのが現状である。一方では、非利用者を対象とした調査を行い、実態を把握することはマーケティング分野では盛んに論じられており、公共図書館の運営においても、その必要性は高いものと考えられる。

つまり、これまでの先行研究は、以下のような特徴を持っており、この点を超えた研究を進める余地があるものと考えられる。

1) 公共図書館の利用についての研究は、図書館を実際に利用した人々に対して分析したものが、大半を占め、非利用者にはあまり焦点が当てられていない。

2) 利用・非利用に影響すると予想される要因のうちの、重要なもののいくつかは調査されていない。

イタリア人で『知の広場』の著者として知られる Agnoli は、図書館が正面から取り組むべき社会背景を論じるうえで、どのような潜在利用者がいるか、それらはどのような人なのかを知ることが重要だと述べている。これまで、様々な要素と図書館利用をはじめとするメディア利用についての関わりについて検討が行われているが、この点を総合的に論じたものがあまり見うけられない。

Harris は、図書館情報学の方法論に対して批判的な主張をしており、この分野の研究は全体論的な

ものであるべきだと述べている。

本研究では、潜在利用者を含む、公共図書館利用者の実態を把握するために、質問紙による調査とインタビュー調査を行い、その結果から様々な利用の要因について総合的に分析・考察を行っている。さらに、公共図書館のあるべきモデルについても、得られた知見の範囲内で、これを示唆している。その意味で、本論文は高い独創性を持っていると言えよう。

3.2. 論文構成の明晰性と研究手法の適切性

本論文では、まず、研究の背景を、公共図書館の動向やそれに密接な関係を持つ読書の状況の分析から記述している。そのうえで、既存の研究で十分に展開されなかった「個人的背景」や競合組織としての「書店」についての分析の必要を述べている。そのうえで先行研究の達成内容について、いくつかグルーピングして検討している。その次に、こうした点を解決する研究として、研究全体の構想を明確に論述している。調査手法の説明に続いて、調査の概要と結果が示され、さまざまな側面から検討を加えている。項目はさまざまだが、いずれについても「図書館の利用と非利用を分ける要因は何か」という根本的な主題に凝縮させている。特に、本研究は、公共図書館の利用・非利用に影響を与える要因を総合的に明らかにする目的で、12の質問紙調査とインタビュー調査を行っている。手法面から見ると、利用者・非利用者への質問紙調査によりデータを収集し、相関分析、重回帰分析、二項ロジスティック回帰分析、パス解析などの統計的手法を援用して分析を行うというものである。最後に、結論を述べ、研究の限界と今後の課題を明らかにしている。

3.3. 本研究の学術的意義

本論文では、先行研究やこれまでの調査結果、マーケティングの概念などから公共図書館の利用・非利用要因を「個人的な環境」「公共図書館側の環境」「一般社会の環境」の三つに分類し、そこで考えられるできるだけ多くの要因を抽出している。とりわけ一つ目の「個人的な環境」と公共図書館利用に着目して、両者の間の関係を分析している。個人的な環境は、これまでに調査が行われた例はあるが、非利用者を含み、詳細な個人の背景にまで及んだ調査はほとんど見られない。さらに、公共図書館に対して、個人の抱いているイメージに関する調査はごくわずかである。本論文では、これらの個人の背景と周辺環境の中から、公共図書館の利用に影響があると予測される変数を選択し、公共図書館の利用との関係を検討している。「公共図書館側の環境」と公共図書館の利用との関わりについては、公共図書館の方針などを参考に、利用を促進あるいは阻害する要因となるような立地、開館時間、サービス状況と実際の利用との関係についても検討している。

その結果として、「公共図書館に対して人々が抱いているイメージ」「公共図書館利用の代替手段となる情報収集方法」「個人の日常の読書状況」の三つが利用頻度に影響を与える重要な変数として浮かび上がった。特に、イメージに関しては、公共図書館に対する人々の心理面での好意や、外観や雰囲気を与えるようなイメージが、利用に影響を与えることが示唆されている。図書館の与えるイメージの重要性は度々指摘されてきたが、本研究によりそうしたイメージが利用に影響を与

える可能性が実証的に示されている。これらの結果から導かれる、公共図書館のひとつのモデルは、「近年の新しいサービス展開」と「伝統的な公共図書館のサービス」の共存という形で、実現可能性を考えることができよう。

本研究独自の特徴のひとつは、図書館利用者の心理的な側面に踏み込んで調査を行っている点である。これまでも、イメージという心理的な事柄について質問されているが、その結果を、利用・非利用や利用頻度に与える影響と関連づけて分析している例は、ほとんどない。また、「読書の状況」は公共図書館に関係する調査でよく質問されているが、読書の意欲についてまで質問されたケースは見られない。さらに、心理的な事柄とそれ以外の調査対象者の属性、メディア利用などを合わせて総合的に分析した研究は、本研究の独自の視点であると考えられる。さらに、結論においても、公共図書館利用についての「イメージ」が公共図書館の利用・非利用や利用頻度に影響を与える可能性を示唆している。

一言でいうと、本研究は、公共図書館の利用と非利用を分ける要因について、さまざまな視点から、総合的に検討したことに、その大いなる独自性を認めることができよう。

4. 今後に向けての課題

本論文には、しかしながら、以下のような課題も存在する。

(1) 「機会の平等」と「結果の平等」の区別

公共図書館が、人々に平等に開かれているという理念を描いたり、それに基づく運営目標を立てたりする場合、上記のどちらを目標とすることになるのであろうか。これまで、男女間の差別、学校教育、経済格差などの分野で論じられてきたこの問題を、公共図書館について、どのようにとらえるべきかということは、単に図書館についての学術研究のみならず、今後の図書館のあり方といった規範的、あるいは政策的方面での貢献をも志向する本研究においては避けて通れない問題であろう。

機会の平等は、公共図書館にかかわる制度や法的枠組みの整備によって実現の方向に動くであろうし、結果の平等は、図書館の活動のパフォーマンスを評価したうえで、図書館の姿全体を検証しなければ確定し得ないものと思われる。今回の論文における「すべての人々に開かれた公共図書館を目指す」との問題意識の説明とその後の論述展開の中では、上記のどちらに基軸を置いているのについての説得的な説明が、十分になされているとは言い難い。

(2) ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）と公共図書館利用の関係

公共図書館とソーシャル・キャピタルの関連について指摘しているのは、社会の中に図書館を位置づけるという著者の構想から見て、意義ある点だと思われる。しかし、これまでのところ、公共図書館の存在がソーシャル・キャピタルの構築を促進しているのか、ソーシャル・キャピタルの充実している地域や環境において公共図書館が整備されているのかについては、にわかには判然としない。この両者の因果関係の分析は、この論点において非常に重要であるものと思われる。本論文の中で、若干でも方向性にめどを付けることが望ましかったが、現実には今後の大きな課題として

残されている。

(3) イメージに関する因子分析での投入形容詞の問題

イメージを表すさまざまな形容詞対を採用して因子分析が行われている。その結果、3種類の因子による枠組みを提唱している。しかしながら、こうしたケースでは、当初の形容詞対をどのように選択するかによって結果が大きく左右される可能性がある。そうした形容詞対の選択について、より説得的な説明が必要であろう。そうでないと、今回提示された3種の因子が、どの程度普遍性を持つものかについては、疑問が残ることとなる。

(4) 「内的好意」イメージ因子に対する図書館の働きかけの可能性

本論文は、学術論文として構想・執筆されたものではあるが、現実の公共図書館の整備や自治体等の図書館政策にとっても参考になる点を含んでいる。動線上の立地の有利性の指摘や書店とのイメージ比較などは、図書館整備において重要な参考データとなる。

しかしながら、本論文を政策的に活用する場合、問題となる点もある。たとえば図書館に対するイメージを「内的好意」と「外的感覚」に区別しているが、外的感覚についての図書館のイメージ刷新は比較的容易に行うと想定されるのに対して、内的好意の改善、つまり、人々の足を公共図書館に向かわせるようにする方策は、論文中には十分には示されていない。この点は、学術論文としての価値を減ずるものではないが、本論文が扱う内容が、すぐれて実務的なテーマである点から見ると、やや食い足りない感を禁じ得ない。

(5) 統計的手法のより洗練された活用

公共図書館の利用頻度に影響を与える要因について、各要因について利用頻度との相関関係を調べるとともに、最後に、諸要因を一括して、利用頻度を従属変数とする重回帰分析を行っている。この中では、たとえば、学校図書館の利用経験という要因のように、単純相関の場合と重回帰の場合とで、方向が逆になっているケースがある。これについては、非常に重要な問題なので、より丁寧な説明が必要であろう。

調査全般についても、こうした統計的手法を調査に採り入れる場合、回答者の偏りを避けるため、サンプルを無作為に抽出することが望ましいとされている。今回はインターネットでの調査も利用しているが、潜在利用者も含めた調査を行う場合には、できるだけランダムにサンプルを収集することが大きな課題である。さらに、分析においても、求める内容に応じて、最適な分析方法を採用しているかどうか、再考すべき余地が残っている。また、分析方法を念頭に、より完成度の高い質問項目を用意することが必要なケースも見られた。

今後は、以上のような課題を克服して、今後の公共図書館の充実発展に資するような、より説得力のある研究を行うことができるよう努めてゆくことが必要である。また、研究結果から導かれる公共図書館のあるべき姿についてのモデルも、よりよいものにしてゆくべきであろう。

5. 全体的評価

上記の諸問題は、今後の研究によって問題の性質を詳細に明らかにして行く中で、解決されてゆくことが十分に期待されるものであり、本論文自体の独創性や学術的価値をいささかも損なうものではない。とくに、社会における公共図書館の意義を、生き生きと描き出した点は、本論文の大きな魅力である。

図書館というのは、社会の文化的側面を担う重要な組織である。日本においては公共図書館の数的面は、それなりに整備されてきたが、公的機関としてすべての人が、こぞって利用するような施設にはなっていない。長谷川氏は、公共図書館の非利用者に注目し、何が利用と非利用を分ける要因となっているかを、研究課題としてきた。その中で、読書状況や個人的環境の問題が影響していることとともに、図書館について抱いているイメージが、図書館の利用に際して何らかの影響要因となっていることを突き止めた。とくに、イメージ要因を「内的好意」に関するものと「外的感覚」に関するものに分けて追究するなどユニークな方法でアプローチを試みている。また、個人にとって書籍にアクセスする場所として、図書館とともに、あるいはそれ以上にポピュラーな存在である書店のイメージを、図書館のそれと比較して、興味深い結論を導いている。

さらに、個人の持つソーシャル・キャピタル(社会関係資本)と公共図書館の関連を調査分析し、閉じたサークルで付き合いを持つ人が公共図書館の利用においても頻度が高い、などの知見を得ている。公共図書館というのは、すべての人々に開かれた情報拠点として、この先、社会的価値をより高めてゆくものと考えられる。今後、ソーシャル・キャピタルの状況と公共図書館利用の因果関係の分析など、社会の中に図書館をいかに位置付けるかという点について、独創的な研究を積み重ねてゆくものと期待している。そのような方向に向けて、長谷川氏の研究は、重要な貢献が可能だと考える。

6. 結論

以上の点を総合的に評価して、本審査委員会は全員一致で、本論文を、博士(社会情報学)の学位を授与するに値するものと認定する。